

薬草園の花だより

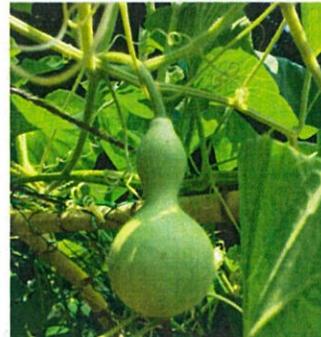
第19号

2019年（令和元年）9月28日発行

■第19号に寄せて

暑い日々が続きましたが、いかがお過ごしでしたでしょうか。かつては、「暑さ寒さも彼岸まで」とよく言われていたのですが、最近は暑さがおさまるのが遅くなったとのこと。実感します。薬用植物園では、この夏に楽しんでいただこうと思ってセンナリヒヨウタンの種を蒔いたのですが、天候のせいか、千成りとはならずに終わってしまいそうです。

とはいえ、ひとつひとつの植物たちは、人間が見ていようがいまいが、それぞれの自己表現を目一体しています。夏はとくにそれを感じる季節です。植物たちはなぜ、こんなにも精一杯に花を咲かせたり、果実をつけたりするのでしょうか。そして、また不思議なのは、植物たちはなぜ、人間に役立つ化合物や害をなす化合物を作り出しているのでしょうか。その謎を探るのはまさに薬学の使命のひとつだと思います。これらの中から、使い方によっては私たちが薬と呼べるものを探し出すことが薬学徒の使命なのだと思うわけです。ひとつひとつの植物を慈しみつつ、それぞれの植物の自己表現を見ながら、彼らとどのように付き合っていくかを考えることも楽しいかと思います。是非、時間を作って薬用植物園に足を運んでください。(日本薬科大学薬用植物園長／船山信次)



センナリヒヨウタン

■今咲いています・見頃です

《ヒガンバナ》

この時期になるとどうしてもヒガンバナの紹介をしたくなります。今、薬用植物園温室外の東北側の桜並木の下の花壇でヒガンバナが赤い花をつけています。まさにお彼岸の時期を忘れずに咲くこの不思議な植物は、「赤い花なら曼珠沙華」といわれる様に私たちの生活に密着している植物です。そのためか、ハミズハナミズとかシビトバナなど、少々縁起の悪いものを含め、数百にのぼる異名があるとか。ヒガンバナアルカロイド類を含む毒草でもあります。

ヒガンバナは、かつて土葬だった時代には、墓を野犬に荒らされぬ様に埋葬した周囲に植えられたりしたこと、まさにお彼岸の時期ぴったりに咲く性質などから少々気味悪がされることもあった植物です。しかし、海外では葉の無い時期に突然花茎だけ伸ばして花をつけることが面白がられ、「マジックリリー」などと呼ばれて親しまれています。近年はその学名のリコリス (*Lycoris*) の名前で、わが国でもこの仲間の植物が庭によく植えられるようになりました。

結構、花色の幅が広く、赤はもちろん、わが国に自生するものとしても黄色のショウキランや朱色のキツネノカミソリ、ピンク色のナツズイセンなどがあり、白色のシロバナマンジュシャゲも知られています。最近、ピンク色のヒガンバナが見出され発売されました。まだ珍しいようで、球根も高価ですが、今年、自宅にて初めて栽培してみたところ、とても上品な花を咲かせることがわかりました。いずれ増殖したら、薬用植物園にも寄付したいと思っています。まずは写真だけで楽しんでください。なお、この仲間の植物は近年、中国の野生種が盛んに輸入されています。ヒガンバナは3倍体のため不稔性ですが、新たに導入された中国産のものの中には種子を結ぶものもあり、交配種もつくられるようになりました。



ヒガンバナ



シロバナマンジュシャゲ



ピンク色のヒガンバナ

《ニチニチソウ》

暑い夏の間には花をつけるのを休む植物も多い中、ニチニチソウが元気に花をつけ続けています。花期の長い花で、わが国でもニチニチソウの他、ピンカなどと呼ばれて親しまれています。この植物はもともとアフリカ東部のインド洋に浮かぶマダガスカル島原産ですが、今は、園芸植物として、ごく普通に栽培されるようになりました。

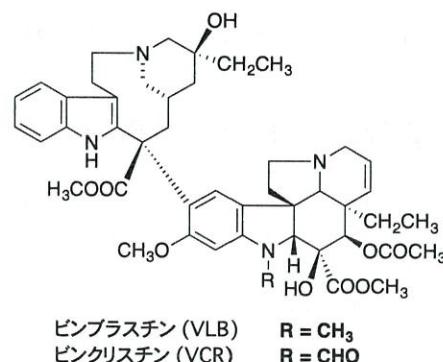
しかし、実はこの植物は大変に重要な化合物を作り出している薬用植物でもあるのです。その化合物とはインドール系アルカロイドのビンプラスチン (VLB) とビンクリスチン (VCR) です。



ニチニチソウ

ビンプラスチンの略号が VLB となっているのは、この化合物の別名がビンカロイコブラスチン (vincaleukoblastine) であり、この略名が使われているためです。大変に複雑な化学構造を有していますが、ニチニチソウは立体構造を含めて間違いなくこれらを作り続けているわけですから偉大ですね。

なお、ピンカとはニチニチソウの旧学名である *Vinca rosea* の属名です。その後、この植物は *Vinca* 属とは異なっていることが指摘され、この植物の現在の学名は *Catharanthus roseus* となりました。



■最近の他の植物写真から

いつものように、薬用植物園内と近辺にて最近撮影した植物写真から、いくつか選び出してみました。

ゲンノショウコの花は小さいのですが、よくみるととても整った形をしています。それもそのはず、その学名はゼラニウム (*Granium*) です。あのヨーロッパの国々で窓辺を飾る絶大な人気を持つ植物の仲間なのです。面白いことにゲンノショウコの花の色はわが国の東部では白、西部ではピンクです。さて、この薬用植物園のゲンノショウコはもとからここにあったものなのでしょうか、あるいは、もっと西方からやってきたのでしょうか。ゲンノショウコは日本薬局方にも収載されており、わが国の民間薬の雄のひとつといってもいいものでしょう。

薬用植物園の入り口近くの花壇でニラの花が咲いています。とても上品かつ端正な形をした花です。ニラも生薬として使われます。一方、ベゴニアの仲間のシュウカイドウも咲き始めました。この植物の茎や葉は噛むと酸っぱいのですが、これはシュウ酸を含むためです。ですから、たくさん食べるなどはもってのほかで、ちょっと味をみるだけにとどめておくべきです。別名を断腸花ともいいます。永井荷風 (1879-1959) は庭にこの花があったので、死の前日までの 42 年間綴った日記の表題を『断腸亭日乗』としていました (日乗とは日記の意味です)。



ゲンノショウコ



ニラ



シュウカイドウ

■薬用植物園からのお知らせ

《ハロウィンの飾り付けを開始しました》

今年の薬用植物園の七夕飾り、楽しんでいただけましたでしょうか。季節が変わりましたので、薬用植物園では今年もハロウィンの飾り付けをし始めました。だんだんとしのぎやすくなっています。キキョウやオミナエシ、ハギの仲間の花も見られます。是非、薬用植物園に足を運んで秋の植物を満喫してください。